

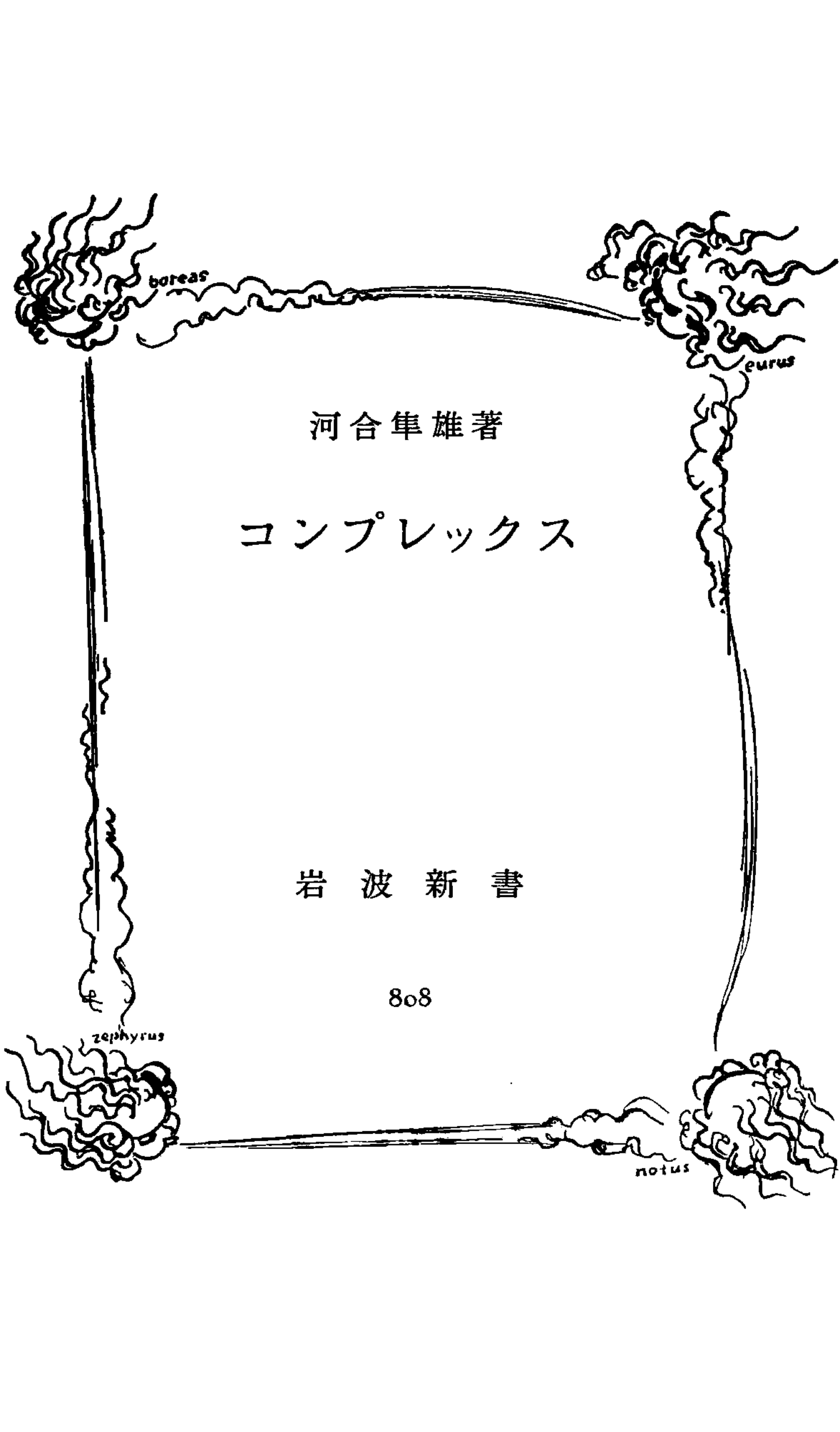
河合隼雄 著

コンプレックス



岩波新書

808



boreas

eurus

河合隼雄 著

コンプレックス

岩波新書

808

zephyrus

notus

河合隼雄

1928年兵庫県に生まれる
1952年京都大学理学部卒業
1965年ユング研究所(スイス)よりユング派精神分析家の資格を取得
専攻—心理学
現在—天理大学教授
著書—「ユング心理学入門」「箱庭療法入門」「臨床場面におけるロールシャッハ法」「カウンセリングの実際問題」
訳書—クロッパ、デイビッドソン共著「ロールシャッハ・テクニク入門」

コンプレックス

岩波新書(青版) 808

1971年12月20日 第1刷発行 ©
1972年2月10日 第2刷発行



著 者 ^{かわ}河 ^い合 ^{はや}隼 ^お雄

東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行者 岩 波 雄 二 郎

東京都新宿区改代町24
印刷者 田 中 昭 三

発行所 東京都千代田区 株式 岩 波 書 店
 一ツ橋 2-5-5 会社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

理想社印刷・田中製本

目次

第一章	コンプレックスとは何か	一
1	主体性をおびやかすもの	二
2	言語連想検査	八
3	自 我	一七
4	コンプレックスの構造	二六
第二章	もう一人の私	三七
1	二重人格	三八
2	二重身(ドッペルゲンガー)	四〇
3	劣等感コンプレックス	五五
4	心の相補性	六三
第三章	コンプレックスの現象	七二

1	自我とコンプレックスとの関係		七二
2	ノイローゼ		八三
3	人間関係とコンプレックス		九六
	第四章 コンプレックスの解消		一〇七
1	コンプレックスとの対決		一〇八
2	トリックスター		一一六
3	死の体験		一二四
4	儀式の意味		一三三
	第五章 夢とコンプレックス		一四三
1	コンプレックスの人格化		一四三
2	夢の意味		一五三
3	男性像と女性像		一六〇
4	夢の中の「私」		一六九
	第六章 コンプレックスと元型		一七七

1	エディプス・コンプレックス	一七
2	文化差の問題	一八
3	元 型	一九
4	自己実現	二〇
	引用・参考文献	二一
	あとがき	二九

第一章 コンプレックスとは何か

コンプレックスというのは、心理学の専門用語である。しかし、現在では日常語のようになってしまつて、「あの人はコンプレックスが強くて困る」とか、「私は音楽についてはコンプレックスがあるのです」とか、普通の会話の中にも使用されることが多い。

この用語が始めてわが国に紹介されたときは、「心的複合体」あるいは「複合」などと訳されていたが、現在ではコンプレックスのままに用いられ、殆んど日常語のようになってしまつてゐる。しかし、この言葉を現在用いられているような意味で、最初に用いたのは、スイスの精神科医ユングであることとか、あるいは、コンプレックスについての正確な意味とかについては、案外知らない人が多い。そこで、コンプレックスについて、あらためて考え直してみようとするわけであるが、先ず始めに、コンプレックスの存在を感じさせるような心理現象をとりあげ、それについて考えを深めてゆくことにしよう。

1 主体性をおびやかすもの

われわれは自分で自分の行動を律することができる、と思っている。何かを食べたいと思えば食べ、食べたくないと思えば食べない。常に自分の意志に従って行動し、主体的に動いている。しかし、常にそうであるとは限らないのである。われわれの主体性は、本人が信じているよりは弱いもので、自分の意志とは異なる行動が生じてくるため悩んでいる人も多いのである。ノイローゼの人達は、何らかの意味で自分の意志に反する行動や観念に悩まされている人、ということが出来るが、その一例として、対人恐怖症の場合を考えてみよう。

ある女子学生は、何となく人が怖くなってきて外出することができないという。別に理由があるわけでもなく、「そんな馬鹿なこととはあり得ない」と思うのだが、いざ外出となると恐ろしくなっていて、どうしても外出できないというのである。この場合、悩んでいる当人も、「そんなことはあり得ない」と解っていたいながら、その意志に反して恐怖心が湧いてくるのが特徴的である。

あるいは、最近とみに増加してきて問題となっている学校恐怖症の場合を考えてみよう。彼

等の多くは勉強もよくできるし、真面目な生徒で、学校や先生が嫌いなわけでもない。(この点で、学校恐怖症という診断名は少し誤解を招くものだ。彼等は意識的には何ら学校や教師に恐怖心をもっているのではない。)むしろ、学校へ行きたいと思うので、前の晩から時間割をしている生徒さえある。しかし、朝になると、「なぜか知らないが、どうしても行けない」のである。この真面目な生徒の意志に反して、学校へ行けなくしているのは誰であろうか。

本人の意志に反する行動という点で、もっとも劇的なのはヒステリーの場合であろう。これから舞台に立つというときに、足が麻痺して踊れなくなったバレエダンサー。会議で重要な報告をしなければならぬ前日から、急に声が出なくなってしまった会社員。これらの場合は、自分の意志に反して、体の機能が停止してしまうのであるから、その人の身体に対する主体性が完全におびやかされている状態である。フロイトやユングが、その研究活動を始めたときは、ヒステリーの患者が多く、身体的には何ら異常がないのに、目が見えなくなったり、耳が聞こえなくなったりするような例が、彼等の初期の論文に多くのべられている。現在では随分少なくなつたと言われるが、無くなつたわけではなく、今でもわれわれ治療者のところに訪れる人もある。

今までのべてきたようなノイローゼの事例に対しては、読者はそのようなこともあるだろう

と、他人のことに思うかも知れない。それは「異常」な人のことで、自分のように「正常」な人間には生じないことだと思ふかも知れない。しかし、この正常と異常の壁は、世人が信じている程、強いものではない。

たとえば、対人恐怖症の場合について考えてみよう。この症状は日本人に特有のもので、日本人の心性を説明する点でも興味あるノイローゼであるが、一般人でこれに近い悩みをもっている人が案外多いのである。「人が怖くて外出できない」などという症状はなくとも、「人前で赤面しやすい」ことを悩んでいる人は相当多いのである。

対人恐怖症の精神病理の解明に努力を払い続けている、京都大学保健管理センター精神科医の笠原助教授は、興味ある統計結果を発表している（『全国大学保健管理協会々誌』四号）。その統計によれば、四二年度K大入学生二四八一名について入学時に行なった質問紙による調査の結果、「赤面しやすい」にチェックした学生は、九九五名（四〇・一％）、「他人の視線が気になる」にチェックしたものの七九八名（三二・二％）であったという。もちろん、これは「この一年間に一度でも」そういうことがあれば「気軽に」マークするように指示されたものであるし、彼等がその一年間、厳しい受験生活にあったことも考慮しなければならぬが、それにしても余りにも多数であるのに驚かされるのである。これらの学生が全てノイローゼなどということはなく、

殆んどが「正常」な学生生活をおくっているわけである。しかし、彼等が自分の意志に反して、対人関係のなかで何らかの不安を経験していることは、否むことのできない事実である。

ヒステリーの例を記載しているユングの報告のなかに、患者が愛する父親の死の報せを聞いて、笑いの発作におそわれるところがある（「分析心理学についての二論文」）。意識的には全く悲しいことと思ひながら、その女性は「笑いの発作」をとめることができないのであった。ヒステリーの劇的な症状をきくと、他人事のように思う人でも、このような「笑いの発作」におそわれた経験のある人は多いかも知れない。子供の頃、厳肅な式の最中に、何でもないことで笑いそうになるのをこらえるのに苦労した思い出とか、笑ってしまったて叱られた思い出などはないだろうか。あるいは、医者診察をうけると、聴診器をあてられると、何もくすぐったくないのに笑いそうになって困った人はいないだろうか。自分の意志による制御を排して、笑ったのは誰なのだろう。

日常場面で、われわれがよく経験する自分の意志に反する行為としては、言いまちがいとか、忘却とかがある。前からよく知っている人であるのに、その人の前にゆくと突然名前を忘れてしまったり、大切なところで変な言いまちがいをしてしまったりする。

ユングは多くのこのような例をあげているが（「早発性痴呆症の心理」）、たとえば、自分の失恋

した女性が結婚していった相手の男性と、仕事上の交際があるのに、手紙を書こうとすると名前が思い出せずに困るという人の例などを示している。このような点については、フロイトも多くを研究し、『日常生活における精神病理』という著作も書いている程である。

筆者が聞いた例として次のようながある。ある女性が旧師と久しぶりに会うことになって、約束の時間に待っていたが先生はなかなか現われない。随分おくれて、「やあ、今日は」と先生が現われたとき、彼女は「長らく御無沙汰しております」と挨拶しようとしたが、「長らくお待たせ致しました！」と言ってしまったのである。

ヒステリーの事例などと違って、この場合の「言いまちがい」の理由は本人にも明らかである。彼女は約束の時間を守ったのに、待たされたので少し腹が立っていた。しかし、一方では旧師の多忙な生活を知っているので、これ位のことはあっても当然という気持もあった。そこへ、先生が現われて、待たせたことに対する挨拶もせず、「今日は」といったとき、彼女の意志に反して、「長らくお待たせしました」という言葉が出てきたのである。それは教師が言うべきことと彼女が期待していたことだった。

この例はなかなか示唆的である。つまり、彼女の心のなかに一種の分離が生じ、一方では待たされたことを心外に思い、一方ではそれを受けいれようとした。そして、後者が一応主体性

をもって行動しようとしたとき、前者が反逆して、思いがけないことを言わしめたのである。この例によって、今まであげてきたような例においては全て、一種の心の「分離」現象があるのではないか、そして、その一方は意識されているが、他方は意識されていないのではないかという点が予想されるのである。

「正常」な人でも、主体性をおびやかされている例を示してきたが、われわれが日常に経験していることのなかには、このようなことが多いのではなからうか。「なぜか解らないけれど、いらいらする」とはどういうことだろう。あるいは、誰か他人に対して、「虫が好かない」などということとは、何を意味しているのか。このような表現法は日本に多いが、なかなか示唆的な表現である。「私」が好かないのではなく、「虫」が好かないのだから、理由は解る筈はない。とすると、私の中に居て、しかも「私」とは異なる「虫」とは一体何か。これらの全ての現象の解明から、コンプレックスの存在が浮かびあがってくるのだが、この節の終りに、もうひとつだけ、主体性をおびやかす現象をとりあげておきたい。

それは、夢である。夢はわれわれ自身の心の現象でありながら、自分の意志に従って夢をみることはできないのである。（夢の現象に、意志の力が全然働かないということも言えないが。）筆者に分析を受けたある人は、恐ろしい夢ばかりみるので、眠る前に幼時期の楽しい出来

事を思い出して心に描くことにしてみたが、それは夢の内容に何も影響を与えなかった。

聖者、アウグスチヌスが、いかに自分の人格を高める努力をしても、その夢の内容には彼の意志を裏切るものがあり、神も人間の夢の内容についてまで責任を追究しないだろうと考えた点について、ユングはしばしば言及している。聖アウグスチヌスをもってしても、自分の欲するような夢をみることは出来なかったのである。

夢にこのような性質があることは、今までのべてきた心理現象の解明に、夢が役立つことを示唆するものであるが、それについては、第五章にくわしくのべることにする。

さて、以上のような現象を実験的に明らかにする方法として、ユングが考え出したものに、言語連想法があるが、それについて次節で説明することにしよう。

2 言語連想検査

ひとつの単語を刺戟語として用い、それについて連想する単語を言わせる、言語連想の検査はユング以前からあり、ヴント（ドイツの心理学者、哲学者）やゴールトン（イギリスの遺伝学者、心理學の研究もした）によって用いられていたが、ユングの卓見は、彼自身ものべているように（エ

ヴァンズ『ユングとの対話』、人々がどのような連想をのべるかということよりも、連想時間が非常におくれたり、連想できなかつたりするという現象に注目した点にある。ひとつの単語に對して、思いつく単語を何でもいいから答えればいいので簡単そうに思えるが、実際に行なってみると、誰も、意外なところで答えられなかつたり、反応がぐっとおそくなつたりすることが見出されたのである。そして、ユングはこのような現象は、知的な問題ではなく、むしろ感情的な要因が背後に働いていると考え、臨床的に利用しようとしたのである。ユングがこの方法に関する知見を始めて学会に発表したのは、一九〇四年のことであるが、これによってユングの名前が学会に知られ、後にアメリカの大学に講義のために招かれる基となったのである。

ユングの用いた言語連想法とは、あらかじめ定められた百個の刺戟語があり、検査者は被験者に対して、「今から単語を一つずつ、順番に言つてゆきますので、それを聞いて思いつく単語を一つだけ、できるだけ早く言つて下さい」といって、ストップウォッチを持ち、刺戟語を言つて相手の反応した単語と、反応時間とを書きとめてゆけばよい。

このようにして、百個の連想が終つたあとで、「もう一度くり返しますので、前と同じことを言つて下さい」といって、再検査をする。前回の反応を覚えていたときはプラス（＋）、忘れていたときはマイナス（－）を記入、一回目と違う言葉を言つたときは、それを記入してゆく。

表1 ユング連想検査の刺戟語

1 頭	21 インキ	41 金	61 家	81 礼儀
2 緑	22 怒り	42 馬鹿な	62 可愛い	82 狭い
3 水	23 針	43 ノート	63 ガラス	83 兄弟
4 歌う	24 泳ぐ	44 軽蔑する	64 争う	84 怖がる
5 死	25 旅行	45 指	65 毛皮	85 鶴
6 長い	26 青い	46 高価な	66 大きい	86 間違い
7 船	27 ランプ	47 鳥	67 かぶら	87 心配
8 支払う	28 犯す	48 落ちる	68 塗る	88 キス
9 窓	29 パン	49 本	69 部分	89 花嫁
10 親切な	30 金持ち	50 不正な	70 古い	90 清潔な
11 机	31 木	51 蛙	71 花	91 戸
12 尋ねる	32 刺す	52 別れる	72 打つ	92 選ぶ
13 村	33 同情	53 空腹	73 箱	93 乾し草
14 冷たい	34 黄色い	54 白い	74 荒い	94 嬉しい
15 茎	35 山	55 子供	75 家族	95 あざける
16 踊る	36 死ぬ	56 注意する	76 洗う	96 眠る
17 海	37 塩	57 鉛筆	77 牛	97 月
18 病氣	38 新しい	58 悲しい	78 妙な	98 きれいな
19 誇り	39 くせ	59 あんず	79 幸運	99 女
20 炊く	40 祈る	60 結婚する	80 うそ	100 侮辱

ユングが用いた連想検査の刺戟語は、初期の頃から、後に用いるようになったものまで少し変化があるが、現在、ユング研究所で用いているものを上に示しておいた。これはドイツ語のものからの翻訳であるが、品詞を変えたりして、少し変更してある。英語のものも、文化差を考慮してドイツ語の刺戟語とは少し変更して用いられている。わが国でも、これをもし本格的に使用するのなら、文化差を考慮して少し変えるべきであろう。(刺戟語85の「鶴」は、ドイツ語では「こうのとり」である。こう

表2 言語連想の結果の一例

刺激語	反応語	時間*	再生
1 頭	鼻	21	—
2 緑	牧場	5	+
3 水	湖	13	ボート
4 歌う	歌	16	—
5 死	S. T. **	42	+

* 時間は1/5秒を単位としてある

** 被験者の義父と似ている人の名前

のとりが赤ちゃんを運んでくるお話はヨーロッパ文化圏特有のものであり、それを考慮して用いられた刺激語であるから、一応、わが国で用いる場合として、「鶴」に変更しておいた。）

反応がどのようになされるかを示すため、表2にひとつの反応例の最初の部分を示しておいた。この被験者はこれによると、最初の「頭」という刺激語に対して、四・二秒で鼻と反応し、再生のときは反応語を忘れていた。2番目の「緑」に対しては、一秒で「牧場」と反応し、これは再生できている。同様にして見てゆくとよいが、3「水」に対しては、湖と反応し、再生のとき

きにそれを間違つて、「ボート」といつている。5「死」に対する反応語は非常におくれ、八・四秒も要し、その反応語も、自分の義父と似ている人を思い出して、その人の名前をのべるなど、異常な点が認められる。

このようにして、百の刺激語について連想をのべるのであるが、いざ受けてみると、一見したときに誰もが感じる程簡単なことではない。一人で表だけをみると、頭と言えは足、緑と言えは赤というふうに答えればよいなどと思つていても、検査者にストップウォッチをもって向かわれると、わ